

自己評価の取り組み

総評 24年度評価、学級経営の視点を整理して考えることを重点に行った。

I 幼児への対応と II 保護者への対応 の2点について、教員全員の回答を求めた。幼稚園教育の質の評価は、毎年度行われる保護者アンケートに一致するとは必ずしも言えず、園のどのようところが良さで、また改善が必要なところかを自ら考えることが大切であると思う。さらに、公の教育を担う学校であることから、園児数確保のために、子どもの発達を無視した独自の教育に陥ってしまうことの無いよう注意したい。厳しい評価の目を教師自身もつことが求められる。

24年度の保護者アンケートでは、家庭との連携ツールのミニノートの活用や園の相談体制に不十分さを感じる保護者の意見があった。このことは、日頃課題意識をもって取り組んでいることだけに、さらに改善が必要である。

個別 教員を経験年数で3グループに分け、達成度を得点にして集計した。

I 幼児への対応について 1.健康と安全への配慮では、病気やケガなどへの対応や、教室内の環境配慮は高得点となった。2.幼児理解では、一人ひとりの幼児のみとりや受け止めは高得点となった。3.指導については、幼児の目線に立つこと、ようじのなりたいモデルを心がけること、幼児のありのままを受け入れること、幼児の遊びを適切に援助すること、においてほぼ達成されている得点になった。4.保護者同士の連携に関して、異年齢児交流への連携が十分でない結果となった。基本的に、学級は年齢別に編成されるため、自由遊びや行事活動において異年齢児との遊びが発展するよう心掛けることが必要である。またクラス的环境構成について、学級学年の枠を超えての意見交換が必要である。

II 保護者への対応について 1.情報の発信と受信では、緊急時や通常時ともに概ね高得点であるが、保育と家庭のあり方の共通理解を得られるよう、さらに努力が必要である。2.協力と支援については、教育的意義づけを持った系統的な支援ができる体制など、概ね良好の結果になった。3.守秘義務の遵守や4.対応上のマナーについては、おおむね高得点であったが、もっといいねいにすべての保護者に対応することが求められると感じる。

課題 今後の課題としては、以上の今年度自己評価を踏まえて、取り組むべきことを実践するとともに、今年度の学級経営に一区切りをつけて、教育課程へ視点を移して研究を進めたいと思う。

園長 石川達也